

人新世のためのアマゾンからの想像
－脱人間中心的なエスノポエティックの創造にむけて－

井垣 昌

Imaginations for the Anthropocene from the Amazonia:
Toward the Creation of De-Anthropocentric Ethnopoetics

IGAKI Akira

This paper presents pieces of poetry echoing the Amazonian cosmology, which seeks to promote the reciprocity and “buen vivir” among different species, to develop social consciousness, and to translate them into social and political actions.

The pieces treated in this paper are works of Juan Carlos Galeano, a Colombia-born poet and one of the pioneers of Amazonian literature in Colombia. On one hand, as ethnographic poetics, Galeano re-elaborates the Amazonian world through its inhabitants’ worldview and depicts fluid interrelationships and transformations that occur between human and other natural as well as supernatural species. On the other hand, as ecocriticism, not so much in his works themselves but explicitly through his annotations and considerations on them, Galeano addresses issues raised in the discussions on the Anthropocene and the dualistic paradigm that operates behind it.

This paper first focuses on the Anthropocene, the Amazonian region, and Galeano’s literary style to better understand and appreciate his works. The following sections discuss aspects of cosmology, humor, and fable. Finally, significant roles the Amazonian imagination plays are indicated with the inter-ethnic and inter-specific interactions taking place throughout his works.

はじめに

人間は、いまや自らの痕跡に包囲されてしまった。
これが人新世のもっとも大まかな定義だとするならば […] ¹

本稿は、2017年に獨協大学において催された国際シンポジウム²によせたファン＝カルロス・ガレアノ (Juan Carlos GALEANO) の報告『ヤクママとクルピラ：人新世に捧ぐアマゾンからの想像』(以下「ガレアノ報告」)³について、その翻訳、注釈、考察を加えて紹介するものである。

ガレアノは、コロンビア南部アマゾン地方で生まれ育った。幼少時代にアマゾン川流域 (以下「アマゾン」) の先住民たちから聞いていた精霊たちの物語を原風景とし、その世界観を詩的な技法で表現するガレアノは、近年、コロンビアにおけるアマゾン文学の先駆者の一人とされている (Wylie, 2014: 8)。

本稿では、ガレアノ報告に含まれる詩作6篇のうち、5篇を紹介する。

1. 「人新世に捧ぐアマゾンから想像⁴」

ガレアノの詩作は、「アマゾン川流域諸国における文化交流と異種交配の歴史的なプロセス」を基底としており、大地と人びとのあいだに展開される対話と互恵関係を語ることで、その地の人たちの一元論的な世界観を描くものである⁵。これは、「人新世を生みだした思い上がり (イエンセン, 2017: 51)」の根底をなす西洋的な二元論への批判でもある。

-
- 1 「人新世」を特集に組んだ『現代思想』2017年12月号の編集後記より (J, 2017: 246)。
 - 2 2017年2月10日、獨協大学国際共同研究「民族伝統文化と多言語教育の実践研究：中国少数民族彝族についての国際共同研究」、獨協大学国際教養学部、エスニックマイノリティ研究会の3団体の共同主催による国際シンポジウム「彝語の世界：言語・文字とその世界観」。
 - 3 上述の国際シンポジウムの第3部「マイノリティの伝統的知識」によせたガレアノによる報告。原文はスペイン語で書かれ、原題は『Yakumama y Curupira: Imaginarios Amazónicos para el Antropoceno』。本稿におけるガレアノ著の邦題 (仮訳) と書誌情報 (発行年) は次のとおりである—『アマゾンのお話』(2016)、『ヤクママ (および他の神話上の生き物たち)』(2014、以下『ヤクママ』)、『アマゾニア』(2012)。なお、本稿におけるガレアノ報告は、シンポジウムのために筆者が日本語に翻訳するとともに補足説明と注を加えたものに、必要に応じて軽微な修正を加えたものである。
 - 4 ガレアノ報告の副題。
 - 5 ガレアノ報告。

1.1 人新世をめぐる想像

「人新世」という新造語は、1980年代にステルマー⁶が非公式に用い始め (Sörlin, 2014)、2000年にクルツェンが国際科学会議の場で叫んで以来⁷、自然科学、社会科学、文学、芸術などの垣根を越えて広く議論され、「まるで正式な地質年代であるかのように科学文献のなかで使われる例が増え」るまでに至っている⁸。この名称が指す地質年代としての開始時期には諸説あり、20世紀半ば以降の大加速時代 (Great Acceleration) とする説が有力視されているものの⁹、「地層に恒久的な痕跡として残るのか」(中村, 2017: 42)、人類の存続にかかる地球規模の環境変化について何を根拠に誰に帰責させるのか (イェンセン, 2017: 54-55) といった議論が続いている。また、人間と環境をめぐるのは、西洋と非西洋、近代と伝統 (イェンセン, 2017: 52-53)、人間中心主義とアニミズム¹⁰といった二項対立的な視座を包括する、より高次の視座に立とうとする文明論におけるメタファーとしても用いられている (イェンセン, 2017; 森, 2017)。

このような全人類的な危機に際して、ガレアノは、「人間以上の世界」につ

6 ミシガン大学天然資源環境学部の生物学者ユージーン=フィルモア・ステルマー (Eugene Fillmore Stoermer, 2012年没)。

7 オゾンホール研究でノーベル賞を受賞した大気化学者パウル=ヨーゼフ・クルツェン (Paul Jozef Crutzen)。メキシコで開催された、IGBP科学委員会 (SC-IGBP: Scientific Committee of the International Geosphere - Biosphere Programme [地球圏—生物圏国際協同研究計画]) で議論を聞いていて、「違う! 今はもう完新世ではない。今は……今は人新世だ!」と叫んだ (吉川, 2017)。

8 国際層序委員会の第四紀層序小委員会で「人新世」ワーキンググループのリーダーを務めるザラシーウィッツ著 (2016) 「地層に刻まれる人類の時代」『日経サイエンス』46 (12), 63-70を引用 (森, 2017: 89)。

9 人新世の始まりは、大型哺乳類の絶滅、新石器革命、コロンブス以降の生物の大陸間移動、化石燃料を用いる産業革命などとされ、大加速時代は、プラスチック、コンクリート、エネルギー、二酸化炭素、核のゴミなどによる地球への影響が特徴である (中村, 2017: 42; 森, 2017: 89; イェンセン, 2017: 54など)。

10 人間中心主義 (anthropocentrism) も、人新世 (Anthropocene) と同様に、字義通りには人類を他の全てから切り離して論じようとする視座であり、それをいかに超克するかが課題となる。アニメーション (生命化) について、ラトゥールは、科学哲学における次のような問題を指摘している。

西洋史における主な謎の一つは、「いまだにアニミズムを信じる人々がいる」ことではなく、多くの人々が […] 単なる物質からなる非生命的な世界をいまだ素朴に信じていることにある。(ラトゥール, 2017: 64)

いて¹¹、それが儂いものであり、そこから得られる知識を、社会意識において昇華し、政策に反映させていくことが、学術および芸術の諸分野が直面している課題であるとしている¹²。ガレアノが詩作をとおして描写するアマゾンの世界では、多くの生物種と主観が交錯し、文化人類学が投射する次のような世界観と相似をなしている。

人新世の議論がなされるようになった時期は、「人間以上 (more than human)」の領域へと踏み込みながら、あるいは「人間的なるものを超えて (beyond the human)」学問を再編成するようになった時期に重なる。文化人類学は […] 動植物やモノなどを含む自然と人間が絡まりあって生みだす世界をめぐる学問へと、思考の方向を大きく転換させてきた。文化人類学は、人間だけからなる世界の中に閉じ籠るのではなく、人間を超えたところから人間について語る学問へと生長を遂げてきたのだと言える。そうした流れの中心に位置するものの一つが、異種間の創発的な出会いを取り上げ、文化人類学を、人間を超えた領域へと拡張しようとする「マルチスピーシーズ民族誌」である。(奥野, 2017: 78-79)

ガレアノの詩作は、人間、動植物、精霊、地上および天空における存在や現象など、自然だけでなく超自然までもが人間と絡まりあって生みだすアマゾンの世界観を、生物種を超えた形でのマルチスピーシーズな民族「詩」(ethnopoetics) として描いている (佐藤報告参照)。

1.2 アマゾンの自然と文化

UNICEF (2010: 1-2) によれば、2010年現在、アマゾンに住む先住民族は247あり、9つの国と地域に暮らしている。また、アマゾンの大部分を占めるブラジルでは、国内に241ある先住民族のうち184がアマゾンに住んでいると

11 ガレアノ報告は、環境哲学者デービッド・エイブラム著 (2017) 『感応の呪文』(論創社・水声社、結城正美訳) の副題『「人間以上の世界」における知覚と言語』(原著: David Abram (1997), *The Spell of the Sensuous: Perception and Language in a More-Than-Human World*, Vintage Books) を引用しているが、報告の原文は「más que lo humano」(人間なるもの以上) である。

12 ガレアノ報告。

される¹³。これら先住民族のなかには、人口が10人以下のものから1万人を超えるものまであり、長きにわたる移動の歴史と異民族間の混血が珍しくない¹⁴。また、アマゾンの代表的な先住民族の一つとされるトゥピ系の先住民たちのように「もともと同じ集団に属していたと思われる人びとの子孫が、遠く離れたところにばらばらに住む」（木村, 2007: 286）といった拡散の歴史、ペルーの亜熱帯雨林帯、熱帯雨林帯での先住民のうち人口が突出して大きなアシャニカのように「外部社会との接触の歴史は地域ごとにかなり異なり、一様ではない」（石川, 2007: 272）といった「内部」多様性によって、アマゾンの人びとは、ことなる規模、言語、文化を紡ぐと同時に、相互に、またアンデス先住民やヨーロッパ人をはじめとする「外部」の人びととの接触をとおして、幾層にも重なるアマゾンの世界を織りなしている（佐藤報告参照）。

ガレアノは、文芸活動の源泉となるインスピレーションを求めて、ペルーのアマゾン地方を中心とする「マルチサイトッドな調査（奥野, 2017: 79）」を行ない、現地の人びとの声を拾っている。多民族地域アマゾンの世界をめぐるガレアノが描く想像と創造には、ペルーの亜熱帯雨林帯・熱帯雨林帯にすむ先住民族アシャニカの次のような宇宙観との類似点が挙げられる。

世界は秩序ある構造であり、そこでは自然と超自然、すなわち目に見えるものと目に見えないものが不可分に交じり合って成り立っている。

世界はたくさんの霊で満ちている。動植物はおろか太陽や月、神や悪魔なども霊なのである。そしてその霊たちは、本当は人間の姿をしている。（石川, 2007: 271）

後述するように、ガレアノの詩作でも、太陽、月、星、雲、川などが、鳥、魚、人間、精霊などと同じ次元で対等な存在としてかかわりあっている。

13 CEPAL (2014) によれば、2010年現在、ラテンアメリカで確認されている先住民族数は826、ブラジル国内で305であり、これらとは別に、未確認の民族は推定200である。

14 木村はパノ系先住民を事例に挙げ、帰属について次のように述べている。

血縁関係は個人の集団への帰属を決める際の決定的な基準にはならない。どの集団とともに暮らし、その集団へ実質的に帰属しているかどうか、一番重要なことである。そして、これは先住民同士に限らず、非先住民同士の混血の場合も同様である。明らかに非先住民との混血であっても、先住民の村落に住んで帰属が明らかであれば、完全に先住民として扱われることになる。（木村, 2007: 287）

1.3 ガレアノの表現技法

上述したように、マルチスピーシーズな民族誌としてガレアノが再現するのは、現地の人びとが語る言葉の忠実な書き写しではない。むしろ、独自の手法によって新たな口承説話を創作することで、物語の様々なバリエーションを包括しつつ、生の声が語りかけてくるような独特な文体によって、物語のエートを詩的な表現に仕立てている (Uzendoski, 2016 : 15-16)。そこで用いられている表現技法は、ラテンアメリカにおけるナラティブ・ジャーナリズム¹⁵、あるいは魔術的リアリズム¹⁶に通じる。

ガレアノは、人類学におけるマルチスピーシーズ民族誌と同様に、文学におけるエコクリティシズムの一環として、人新世を意識した創作活動を行ない¹⁷、「どのようにすれば、私たちの研究、学術活動、芸術活動を、政治変革の領域に展開できるか？」という問いを投げかけている¹⁸。本稿で紹介するガレアノの詩作は、この問いについての彼自身の軌跡であると同時に、我々の地球環境に対する想像と理解の糧となろう。

15 「純粋客観報道とは異なり、取材した事実を物語的に再構成して読者の興味をひきつける方法論」(日本ラテンアメリカ学会ホームページ「講演会のご案内(早稲田ラテンアメリカ研究所)」)。(http://www.ajel-jalas.jp/news/2017/news20171116-2.html)

16 地理的、文化的な背景について、チリの代表的な小説家イサベル・アジェンダは次のように述べている。

海のように広大な大河、木々が密生し、陽の差し込まないジャングルなどのある大地。その腐植土の上を神話的な動物が這いまわり、天地開闢以来少しも変化していない人間が生きている土地。驚異の象徴である星を額にいただいて人が生まれてくる、桁外れの大地。[...] こうしたものに囲まれた魔法の大陸がラテンアメリカなのである。(木村, 2009 : 583)

また、コロンビアの作家ガルシア＝マルケスは、ラテンアメリカの現実とその描写について、「毎日のように信じがたい出来事が起こっているラテンアメリカの生活に対応するようなラテンアメリカ文学が生まれてくる」と述べている(木村, 2009 : 584)。

17 ガレアノは、米国の環境文学会 (ASLE : Association for the Study of Literature and Environment) に所属しており、自身の著『アマゾンのお話』(2016) では詩作の注で「人新世」に言及している。

18 ガレアノ報告では、「気候変動が及ぼす環境危機についての議論において、人間科学と芸術には、どのような貢献ができるか？」という問いが立てられている。これは、「人新世が『警告』となっている今、文学はどのように読まれ、解釈されるのか」(奥野, 2017 : 83) という問いに対する、社会政治的な実践への試みであるといえよう。

2. アマゾンの想像からの天地創造

豊穡の大樹についての口承説話は、アマゾンの先住民たちに共通してみられる世界観であり、生きているものが死に、死んだものが生まれ変わることによって生命エネルギーの循環が保たれている（Galeano, 2016 : 125）。ガレオノは、「モニヤ・アメナ」という娘を主人公とするアマゾン創世記を、『アマゾンのお話』の第1篇に据えている。

モニヤ・アメナ¹⁹

その昔、森で食糧が乏しくなり、人びとは深刻な飢えに陥りました。ある日、家族のために果物を探し歩いていた娘が、ミミズに出会いました。驚いてよく見ると、ミミズは青年に姿を変えて言いました。「モニヤ・アメナよ、私はこの近くで独り寂しく過ごしています。毎日、私に会いに来てくれるなら、人びとのために食糧を差し上げましょう。」

娘は、魅力的なその青年からの申し出に喜び、キャッサバ、クプアス、ブドウ、その他の果物を家に持ち帰りました。

ある日、葉で作られた巣の中で娘が青年と抱き合っているところを母親が見つけて憤激し、「この裏切者！そこら中を探したのよ。こうしてやるわ。」と言って、鍋いっぱいの熱湯を2人にかけてました。

娘はバナナの葉に身をくるめて助かりましたが、青年は叫び声をあげて死にました。

食糧不足は一層深刻になり、人びとは再び飢えに苦しむようになりました。すると、青年が死んだ場所に樹が生え、天まで届くほど大きくなり、やがて、さまざまな果物を実らせ、豊穡の樹とよばれるようになりました。豊穡の樹のおかげで、人びとに平穏が戻ったのです。

ある時、果実を食べに来ていた何人かの人が、この樹を切り倒して果物ごと持ち去ってしまいました。

その後やって来たのは、暗闇と悲しみでした。樹を切り倒した人の子どもたちには何年も災い続き、まだ親が生きていた頃の、食べ物に恵まれていた日々を思い出しては嘆いていました。

19 “Moniya amena” (Galeano, 2016 : 23-24).

その様子を見て、森の精霊たちは言いました。「人びとが苦しんでいる。切り倒された樹を腐らせ、幹を川にしよう。地上で一番大きな川、この人たちが飢えに困らないよう、魚と果物に恵まれた川に。」

それ以来、誰も飢えに困ることはなくなりました。幹は川になり、動物や樹々に栄養を与え、雲に飲み水を与えるようになり、葉は東に落ちて海になり、枝はプトゥマヨ川²⁰、カケタ川²¹、マデイラ川²²などになってアマゾン川に水を注いだのです。

森に住む人のなかで、食べ物を独り占めすることを思いつく者など一人もいませんように、というのが人びとの願いです。

このお話では、ミミズが青年に、青年が樹に、樹の幹が川に姿を変えながら、果物、森の精霊、魚とともに、人間との相互作用を通して世界が形成されている。「人間中心主義を脱中心化」(奥野, 2017 : 78) するお話として、ガレアノは次のように述べている。

このお話は、樹を川の起源と結びつけているだけでなく、この地に棲む人びとが抱えている、生態系への配慮を語っている。そしてこれは、現代の私たちに突き付けられた、人間と非人間という二項対立を相克するような、環境に関する新たな想像力の創出に呼応していると言える。(Galeano, 2016 : 125)

また、超自然的な存在や変身を交えるアマゾンの語りは、異種交配と関係の流動性を通して、「自然界 = コスモス」と「人間社会 = ポリティクス」を相互に閉鎖的で排他的な領域とする世界観に対して、コスモポリティクスを想像することで脱構築するものである²³。このことは、「脱中心化」を脱ヒエラルキ

20 コロンビア南部のアンデス地方を水源とし、コロンビアとエクアドルの国境、コロンビアとペルーの国境を流れるアマゾン川の支流。

21 プトゥマヨ川と同じ地域を水源とし、プトゥマヨ川の北側をほぼ平行にコロンビアからブラジルにかけて流れるアマゾン川の支流。

22 ペルー南東部およびボリビア中部から流れ込む川を水源としボリビア最北部からブラジルにかけて流れるアマゾン川の巨大支流。

23 ガレアノ報告。

一化と捉えれば、人間を非「霊長」類化するものであるとも言えよう。

3. アマゾン的な想像からのユーモア

自然を人間中心主義における他者とせず、超自然と人間とともに包括して捉えるアマゾンの人びとの語りからインスピレーションを受けて、ガレアノは自身の詩作に自由奔放な発想とユーモアも込めている。

本節で紹介する、『アマゾニア』からの2篇の詩作には、ピンクイルカとして知られるアマゾンカワイルカが登場する。その皮膚の色から、アマゾンの人びとは、白人、外国人、さらには「ヤンキー」に結びつけ、富裕層の象徴としての語りの中では、「もう一つのモダニティ」という形で、西洋的な快適な生活を川底で営むものとしている（Galeano, 2016 : 126）。

3.1 天空と大地のあいだの往来

本節で紹介する詩作には、太陽、月、雲、魚などが、魂や人間の能力を備えたものとして登場する²⁴。

レティシア²⁵

太陽と雲のどちらが正午を勝ち取るかカードゲームをした²⁶。

雲が勝って、街に魚とイルカを降らせた。（負けたらサングラスをかけて地上に降り、観光客と日光浴することになっていた。）

魚たちはタクシー運転手として働き、夕方になると星々の中で眠るために空に昇っていく。

イルカたちは家々の中庭でギターを弾き、娘たちを口説いている。

情熱的な心を持っていた一つの雲が、もう太陽とは張り合えないと言って、酔って着の身着のまま川に飛び込んだ。

24 アマゾンの低地に住む人びとのコスモロジーによれば、人間と非人間とのあいだにおいて西洋で見られるような固定的な種の境界はなく、種とは外見上の衣にすぎず、人間の姿を内に秘めているだけであるとされる（Vermeylen, 2017 : 146）。

25 “Leticia”（Galeano, 2012 : 46）、コロンビア南部アマソナス特別地区の主都。ブラジル、ペルーとの国境にある同国唯一の河港。

26 この詩作は、原文ではすべての動詞に現在形が用いられているが、歴史的現在として解釈し、日本語への翻訳では過去形も用いた。

太陽は毎晩、川を旅するサーカスで火炎吹きとして働いた後、イルカや娘たちと水浴びをした。

この詩作のように、ピンクイルカは一般に、女性を魅惑する男性として表象され、予期せぬ妊娠にも結びつけられている (Galeano, 2016 : 137)。

3.2 川と陸のあいだの往来

上述の詩作におけるピンクイルカをめぐる人間との種と性は、次に挙げる詩作の主なテーマとなっている。

ピンクイルカ²⁷

イルカたちは、船の後について泳ぐとき、男たちの眼差しに込められている憎しみを和らげるために、ピンクのドレスを着る。

「私たちだって人間と同じように愛を営むのに、なぜ憎まれなくてはいけないのでしょうか。」

夜になるとイルカたちは陰毛を生やして、女性たちをさらいに出かけるというのが、ちまたの噂だ²⁸。

子どもたちはイルカのことを、夕方になると川で裸になって水浴びをするヤンキーだと思っている。

釣り人たちは、イルカのペニスを切り取って、女性の恋心をつかむためのお守りとして売っている。

この詩作では、ピンクイルカは人間と同様に独自の世界と生活を川底で営んでいること、ピンクイルカが男性としての性的な能力と魅力に優れていることに対して、相反する感情が「噂」と「お守り」として表象されている。

27 “Pink Dolphins” (Galeano, 2012 : 54).

28 アマゾンカワイルカについてスペイン語、英語、日本語などでインターネットで検索すると、「夜中に美男子に化けて現実または夢のなかで若い女性に近づいて妊娠させ、翌朝にはイルカになって川にもどる」という伝説を紹介するホームページがヒットする。

なお、「ギターを弾いて、女性を口説いている」ピンクイルカは、同書の表紙絵となっている（図1）。



図1 「ピンクイルカたち (Delfines rosados)」
（『アマゾニア』の表紙）
（絵：Jaime Luis Chocote、
ペルー北東部アマゾン地方出身）

4. アマゾン的な想像における水の守護霊と森の守護霊

アマゾンの亜熱帯雨林・熱帯雨林には、川の守護霊ヤクママ、森の守護霊クルピラが宿っているとされている。ガレアノは、これら精霊のお話を通して、「ブエン・ビビール（よき生活）²⁹」に通じる人間の感性と良識を喚起している。

これらの精霊は、一方では、「アマゾンの」世界観を表象しているものの、他方では、「アンデスの」文化的、言語的な要素との混淆に由来している。本節では、『ヤクママ』から2篇を紹介する。

29 アルクの英和・和英対訳データベース「英辞郎 on the WEB」は、「buen vivir」を見出しに設け、次のように説明している。

ケチュア語のSumak kawsayをスペイン語訳したもの。日本語に直訳すると「よい生活」となるが、これは自然環境と調和しつつ、人間として尊厳のある生活を送ることを指す。2008年に改定されたエクアドル憲法でこの概念が採択されて以来、特に中南米においてこの概念が広まりつつあり、英語文献でもスペイン語のままbuen vivirと表記されることが増えている。（<https://eow.alc.co.jp/search?q=buen+vivir>）

4.1 水の守護霊ヤクママ

ヤクママは、アンデス先住民が信仰の対象とする精霊であり、ケチュア語で「ヤク」は水、「ママ」は母を意味する。アンデス先住民の信仰によれば、ケチュア語で大地を意味する「パチャ」と母を意味する「ママ」からなるパチャママ（大地の母）とヤクママ（水の母）とによる恵みにより、生きとし生けるものが繁栄するとされる（Gómez García, 2011 : 5-6）。また、アマゾンの水はすべてヤクママから生まれていると考えられている（Galeano, 2016 : 137）。

ヤクママ³⁰

川を作り魚を幸せにする唯一の蛇。

アナコンダ、マンエ・ダーグア³¹、大蛇、プラグアも同じ科に属する。毎日、魚たちを連れて散歩や食事に出かける。

ときには、踊り楽しむ人びとを乗せ、イルミネーションに輝く船のように、旅することがある。

ときには、贅沢な衣装で身を纏う有名な女優に変装することもある。ヤクママが望めば、その行くところには雲が列をなす。

ヤクママの愛情なしには育たないセティコもある。

とても繊細で、丁重にもてなさない、去ってしまう。

アマゾンの人びとによって、その行動が予想できないと考えられているヤクママは、物理的および文化的な現実について、西洋の開発主義的なナラティブでは語る事が不可能であることを指摘している（Galeano, 2016 : 137）。

なお、ここで通称セティコと呼ばれる木は、*Cecropia*を指していると考えられる³²。この木は、アリと共生する木として知られ³³、アマゾン的な想像を醸成する生態環境をなしている。

30 “Yakumama” (Galeano, 2014 : 14).

31 ポルトガル語で「水の母」を意味し、ブラジルの伝説において人魚を指す。

32 Duke and Vásquez Martínez (1994 : 185) によれば、アリとの共生 (69) のほかに、アンデス地域の社会的な慣習であるコカ葉の摂取にも用いられている (102, 143)。



図2 ガレアノ報告に用いられた「ヤクママ」
(絵：Solmi Angarita、コロンビア南部アマゾン地方出身)

4.2 森の守護霊クルピラ

クルピラは、コロンビアおよびブラジルの森に住む人たちに最も知られた精霊の一つであり、トゥピ語で「森の住人」を意味するが (Galeano, 2016 : 127)、アンデスの先住民との文化的な接触が生み出したものとされている³⁴。

33 中道は、ジョン・C. クリッチャー著 (1992) 『熱帯雨林の生態学』を引いて、この共生関係について、次のように述べている。

「中南米の熱帯で一番目につく樹木は、セクロピア属 (Cecropia spp. クワ科) である。 […]」 「セクロピアの内部には、アステカアリ (Azteca spp.) が住んでいる。このアリがセクロピアに巻き付こうとするつる植物を切り取ってしまう。それに対するお礼としてセクロピアはアリに生活場所と食物の両方を与えている。つまり、進化的な共生関係が成立している。」 (中道, 1995 : 289-290)

34 例えばブラジル、ペルー、ボリビアの国境地帯では、「いくつかのパノ系住民集団の神話のなかにインカの名が現れ、アンデス文明との交渉が語られている」 (木村, 2007 : 291) もの、クルピラの起源は、これとは異なる先住民によるものとされている。

トウピ・グアラニー系の諸民族は、「アンデスの要素をアマゾン地域に普及させている人びと」として広く認識されている。 […] 「クルピラ」も、もともと異なるいくつもの名称や姿で知られていた「動物たちの主」が、アンデスの影響によって統合されたものであると考えられる。 (Ibarra Grasso, 1980 : 44)

クルピラ³⁵

クルピラは、片足は前を、もう片足は後ろを向いて森を歩き、動物を守り、若いヤシの木の髪を三つ編みにする。

狩人たちは、秘密を聞き出すためにクルピラにタバコを贈る。

クルピラが吸うタバコの煙からは、動物、樹木、果物が見つかる道ができるのだ。

ただし、人間は、動物、樹木、果物を全て持ち去ってはならない。

クルピラは、煙を吹いて動物、樹木、果物を消すことができる。

煙を全部吹いて道を消すこともできる。

さらに、人間を狩るための秘密を動物に教えることもできる。

クルピラは、他の生物を犠牲にして人間に幸をもたらすことも、逆に、人間を犠牲にして動物に幸をもたらすこともできる存在として描かれている。これは、生物の多様性および互惠関係を暗示するものであり、いかなる種をも絶滅させてはならないという戒めにもなっている。



図3 ガレアノ報告に用いられた「クルピラ」
(絵: Solmi Angarita、コロンビア南部アマゾン地方出身)

35 “Curupira” (Galeano, 2014 : 10).

おわりに

ガレアノは、詩作で描くアマゾンの世界について、「アマゾンのエスノポエティック（＝民族詩的）な創造は、多文化性（multiculturality）というよりは多自然性（multinaturality）、すなわち種と種のあいだにおける相互の繋がりを提唱するもの」と述べている³⁶。これは、次のように「文化」の他者として「自然」を対置する人間中心主義に基づく世界観への批判を意識したものである。

人新世に埋め込まれている自然—文化の二元論は、この二元論を採用しない人々や伝統から現れる知的・実践的反応を取り込むことを困難にしています。この二元論が人新世とその課題を明晰に理解することを様々な意味で複雑なものとしているのです。確かだと思われるのは、この二元論の存在によって、人新世についての議論への日本の社会学者と人文学者の積極的な参加が難しくなっている一方、その参加から創造的な突破口が開かれる可能性があるということです。（イェンセン、2017：53）

このような世界観によって西洋近代が推し進めてきた「文明」は、脱生命化（脱アニミズム化）、脱神話化、世俗化といった分節的で無機質な合理主義の行き過ぎによって、地球環境にとっては、逆に「野蛮」とでもいえる存在になっている。このようなことを背景に、ガレアノは、自らの創作活動について、物質のおよび動物的なるものと精霊とを紡ぎ合わせることで再び神話を編み出すものであり、アマゾンだけでなく、ラテンアメリカ、さらに世界全体までを射程に入れているとしている³⁷。

他方、ガレアノの詩作は、いくつかの注で「人新世」に言及しているものの、表面的、直接的には、それをめぐる議論もメタファーも感じさせない。これは、アマゾンの発想による世界を詩的に描くことが、ガレアノの「脱—人間中心主義的な戦略」（Adamson, 2014：256）であるからだと考えられる。そして、詩作をテキストとみれば、民族誌学的テキストが「厳密な意味においては小説でも詩でもないが、広い意味においてはそのいずれでもある」ことと、「著者機能が強く働いているジャンル」として哲学が並置されうることから（森泉、

36 ガレアノ報告。

37 ガレアノ報告。

2012: 269)、ガレアノの詩作は、「厳密な意味においては民族誌でも哲学でもないが、広い意味においてはいずれでもある」といえよう。

引用文献

- Adamson, Joni (2014). "Source of life: Avatar, Amazonia and an ecology of selves", in: Iovino, Serenella, and Oppermann, Serpil (eds.), *Material ecocriticism*, p.253-268. Bloomington, Indiana: Indiana University Press.
- CEPAL (2014). "Los pueblos indígenas en América Latina", en: https://www.cepal.org/sites/default/files/infographic/files/indigenas_espanol.pdf.
- Duke, James Alan, and Vásquez Martínez, Rodolfo (1994). *Amazonian ethnobotanical dictionary*. Boca Raton, Florida: CRC Press.
- Galeano, Juan Carlos (2009). *Folktales of the Amazon*. Westport, Connecticut: Greenwood Publishing Group, at: http://myweb.fsu.edu/jgaleano/pdf/FolktalesExcerpts_sm.pdf
- Galeano, Juan Carlos (2012). *Amazonia*. Iquitos, Perú: Centro de Estudios Teológicos de la Amazonia, en: <http://myweb.fsu.edu/jgaleano/pdf/amazonia-ceta.pdf>
- Galeano, Juan Carlos (2014). *Yakumama and Other Mythical Beings*, 2nd ed. Iquitos, Perú: Tierra Nueva Editores.
- Galeano, Juan Carlos (2016). *Cuentos amazónicos*. Bogotá, Colombia: Icono Editorial.
- Gómez García, José María (dir.) (2011). *Pachamama y Yakumama: deidades protectoras de la vida*. Cusco, Perú: Centro Guaman Poma de Ayala, en: <http://www.guamanpoma.org/blog/wp-content/uploads/2011/09/Folletto-Pachamama-y-Yakumama.pdf>.
- Ibarra Grasso, Dick Edgar (1980). *Cosmogonía y mitología indígena americana*, 2da ed. Buenos Aires: Editorial Kier.
- 石川毅 (2007). 「アシャニカ」、黒田悦子・木村秀雄編『講座 世界の先住民族—ファースト・ピープルの現在 08 中米・カリブ海、南米』明石書店、269-284頁。
- J (2017). 「編集後記」『現代思想』第45巻、第22号、246頁。
- イェンセン、キャスパー＝ブルーノ (藤田周訳) (2017). 「地球を考える——「人新世」における新しい学問分野の連携に向けて」『現代思想』第45巻、第22号、46-57頁。(Jensen, Casper Bruun, "Thinking the Earth: New Disciplinary Alliances in the Anthropocene", 大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター、第3回人間科学セミナー (2016年10月27日))
- 木村榮一 (2009). 「解説」、アジェンダ、イサベル (木村榮一訳)『精霊たちの家』河出書房新社、571-586頁。
- 木村秀雄 (2007). 「パノ」、黒田悦子・木村秀雄編『講座 世界の先住民族—ファースト・ピープルの現在 08 中米・カリブ海、南米』明石書店、285-299頁。
- ラトゥール、ブルーノ (久保明教・小川湧司訳) (2017). 「人新世の時代におけるエージェンシー」『現代思想』第45巻、第22号、58-75頁。(Latour, Bruno, "Agency at the time of the Anthropocene", *New Literary History*, Vol. 45, 2014, p.1-18)
- 森泉弘次 (2012). 「訳者あとがき」、ギアーツ、クリフォード (森泉弘次訳)『文化の読み方／書き方』岩波書店、261-277頁。

- 中道貞子 (1995). 「ガラパゴス諸島・アマゾンジャングルを訪ねて」『研究紀要 (奈良女子大学文学部附属中・高等学校)』第36集、271-296頁。URL : http://nwudir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace/bitstream/10935/1985/1/AN00075153_36_pp271-296.pdf
- 奥野克巳 (2017). 「明るい人新世、暗い人新世——マルチスピーシーズ民族誌から眺める」『現代思想』第45巻、第22号、76-87頁。
- Sörlin, Sverker (2014). “Curiosities: The Anthropocene: What Is It?”, *The Institute Letter Summer 2014*, at: <https://www.ias.edu/ideas/2014/sorlin-anthropocene>.
- UNICEF (2010). “Los pueblos indígenas en América Latina”, en: https://www.unicef.org/lac/pueblos_indigenas.pdf.
- Uzendoski, Michael (2016). “Introducción”, en: Galeano, Juan Carlos, *Cuentos amazónicos*, p.15-21.
- Vermeylen, Saskia (2017). “Materiality and the ontological turn in the Anthropocene: establishing a dialogue between law, anthropology and eco-philosophy”, in: Kotzé, Louis (ed.), *Environmental Law and Governance for the Anthropocene*, p.137-162. Oxford, UK, and Portland, Oregon: Heart Publishing.
- Wylie, Lesley (2014). “Introduction”, *Hispanic Issues On Line*, Vol. 16 “Amazonian Literatures” (Fall 2014), p.1-16, College of Liberal Arts, University of Minnesota, at: https://cla.umn.edu/sites/cla.umn.edu/files/hiol_16_00_wylie_introduction_1.pdf
- 吉川博光 (2017) 「『人新世 (アントロポセン)』における人間とはどのような存在ですか?」『10+1 web site』201701。URL : <http://10plus1.jp/monthly/2017/01/issue-09.php>

